様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 ２５ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１２１８２

研究課題名（和文）話し手の意味の共同主義的プラグマティズム

研究課題名（英文）Communitarian Pragmatism of Speaker Meaning

研究代表者
三木　那由他（Miki, Nayuta）

大阪大学・文学研究科・講師

研究者番号：４０７２７０８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、話し手の意味についての標準的見解となっている意図基盤意味論という枠組みに代えて、共同主義的プラグマティズムというアプローチを構築することを目標としていた。意図基盤意味論においては「話し手が何かを意味する」ということを話し手の意図という概念から説明する。しかし本研究ではMargaret Gilbertの「共同的コミットメント」という概念を用いることで話し手の意味についてよりよい理論が得られることを示した。そうして構築された新理論を「共同性基盤意味論」と呼称するが、この理論では何かを意味するという行為は話し手と聞き手が相互的に引き受けるコミットメントという観点から捉えられることになる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の意義は、コミュニケーションという営みの中核は話し手の意図ではなく話し手と聞き手が相互的に引き受けるコミットメントにあると示した点にある。語用論や心理学におけるコミュニケーション研究がしばしば意図という概念を中心にしていることを考えると、本研究は新たな視座でのコミュニケーション研究の可能性を開くものである。また本研究からは、話し手と聞き手の関係性がコミュニケーションという営みのあり方に密接に結びついていることが含意される。これにより、話し手と聞き手の社会的関係を視野に入れたコミュニケーション研究の可能性、ひいては差別やハラスメントといった現象をコミュニケーション論的に扱う道筋が得られる。

研究成果の概要（英文）：The goal of this study was to construct an approach called communitarian pragmatism as an alternative to the framework of intention-based semantics, which has become the standard view of speaker meaning. In intention-based semantics, what it is for a speaker to mean something is explained in terms of the speaker's intention. In this study, however, we showed that a better theory can be obtained by using Margaret Gilbert's concept of "joint commitment. This new theory is called "jointness-based semantics." In this theory, the act of meaning something is viewed in terms of a commitment mutually undertaken by the speaker and the listener.

研究分野：哲学

キーワード：話し手の意味　コミュニケーション　意図基盤意味論　共同行為　共同的コミットメント

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究開始当初には、話し手が x を発話することで p と意味する（この状況を「話し手の意味」と呼ぶ）とはどういうことかという問題に関する袋小路が生じていた。

H. P. Grice (1957) 'Meaning' (*The Philosophical Review,* 66: 377-388)はこの問題を取りあげた古典的文献であり、話し手の意味を話し手の意図という概念から分析しようとしていた。これを受けて H. P. Grice (1968) 'Utterer's Meaning and Intentions' (*The Philosophical Review*, 68: 147-77)、S. R. Schiffer (1972) *Meaning* (Oxford University Press)、G. H. Harman (1974) 'Review of *Meaning* by Stephen R. Schiffer' (The Journal of Philosophy, 71: 224-229)，J. Bennett (1974) *Linguistic Behaviour* (Cambridge University Press) さらに近年では W. A. Davis (2003) *Meaning, Expression, and Thought* (Cambridge University Press)，M. S. Green (2007) *Self-Expression* (Oxford University Press)など、話し手の意図という概念に注目して話し手の意味の分析の精緻化を目指す一連の研究がなされ、「意図基盤意味論」と呼ばれるパラダイムが現れた。

だが三木那由他(2014)「意図基盤意味論に基づく話者意味の分析はなぜ誤っているのか」(*Contemporary and Applied Philosophy*, 5: 1033-1051)，および三木那由他(2015)「心理的であり公共的である意味について」（博士論文，京都大学提出）では、意図基盤意味論のもとでは話し手の意味の分析は得られないということを論証している。そして意図基盤意味論以外の有力なパラダイムは研究開始当初には見られなかった。

こうして話し手の意味の分析というプロジェクトは袋小路に追い詰められていたが、他方で話し手の意味という概念自体は語用論や心理学など多くのコミュニケーションにおいて明示的に用いられたり、あるいは暗黙に前提されたりしていた。しかもそうした分野においては基本的に、問題含みな理論である意図基盤意味論における理解に基づいた仕方で話し手の意味という概念が用いられていた。それゆえ、話し手の意味に関して意図基盤意味論とは異なる、よりよい理論が必要となっていた。

２．研究の目的

上記の背景を受けて、本研究では話し手の意味に関する新たなパラダイムを構築することを目標としていた。それを研究開始当初は「話し手の意味に対する共同主義的プラグマティズム」と呼称していた（のちに「共同性基盤意味論」と名称を改めた）。具体的には、第一に、意図のような話し手個人の心理というものに焦点を当てるのをやめ、話し手と聞き手が共同で構築する集合的な心理へと着目した理論を目指した。またその際に、その集合的な心理を「世界で起きている事態を写し取るもの」としての表象として捉えるのではなく、一種のコミットメントとして捉えることで、話し手の意味という現象を話し手と聞き手の共同的な行為の次元で捉え直すことが目指された。

３．研究の方法

上記の目的を達成するために、本研究では主に既存の理論への反例構築とその検討、既存の理論の論理的な観点からの検討、他分野の理論の応用といった方法を用いた。具体的には以下の通りである。

①意図基盤意味論の問題点を明確にするために、すでに発見されていたものに加えて、さらに意図基盤意味論への反例となる事例を提示・検討した。

②意図基盤意味論の問題が不可避なものであると示すために、意図基盤意味論に含まれる複数の前提が論理的不整合を引き起こすことを明らかにする論証を構築した。

③Margaret Gilbert の研究成果を中心に、複数のひとが一緒に何かをするという現象を扱う共同行為論に目を向け、そこで用いられている概念、および理論を調査した。

④上記③で得られた結果を、話し手の意味の分析に応用するという観点から改めて検討し、応用の方法を探った。

４．研究成果

本研究による成果として、共同的コミットメントという概念を中核に据えた新たな話し手の意味の理論である「共同性基盤意味論」を構築することができた。この理論は、話し手の意味を話し手と聞き手のあいだでのある特有の共同的コミットメントの構築への話し手における準備表明として捉えるものとなっている。またこの理論が意図基盤意味論に生じた問題を回避しているということも示すことができた。

この理論は、本研究の成果を書き加えるかたちで博士論文を大幅に改定した『話し手の意味の心理性と公共性』（勁草書房、2019）にて公表された。

本理論において第一に重要となるのは、話し手が何かを意味し、聞き手がそれを理解したときに生じる結果を、聞き手が関連する心理を獲得することではなく、話し手と聞き手のあいだで「話し手はしかじかと信じている」という内容の集合的信念を形成することであると考えてい

る点だ。従来の論者は、具体的な事例を検討する際には話し手が何かを意味しそれを聞き手が理解したときに、話し手と聞き手のあいだで何かしら公共的なものが構築されるということを前提しているにもかかわらず、話し手の意味という概念を分析するにあたっては話し手という個人の心理や聞き手という個人の心理だけを問題にしており、それゆえに話し手や聞き手の個人的な心理と話し手と聞き手のふたりのあいだで公共的なものとのあいだのギャップが解決不可能な問題として立ちはだかることになっていた。本研究では集合的信念という従来の研究では用いられてこなかった概念を応用することにより、従来の論者が目を向けていたはずなのに捉えられずにいた公共的な次元を捉えることに成功している。

とはいえ、話し手が何かを意味し、聞き手がそれを理解した結果として生じるものを集合的信念という観点から捉えたとしても、それだけでは話し手が何かを意味するという行為そのものの分析とはならない。そしてこの行為を分析する際に意図やそれに類する概念を用いたならば、結局のところ意図基盤意味論と同じ問題に陥ることになる。そこで本研究では、集合的信念という概念を Margaret Gilbert の理論をもとに共同的コミットメントという概念から捉え、話し手と聞き手のあいだでの相互的な規範性という観点を持ち込むことで、従来の理論よりも話し手や聞き手の心理ではなく話し手と聞き手の行為という側面に目を向ける枠組みを作りあげた。それにより、話し手の意味という概念もまたより行為論的な観点から、「共同的コミットメントに参加する用意を表明する行為」として捉えることが可能になった。

以上のようなかたちで、本研究では話し手の意味という概念を、従来の心理中心的で個人主義的な枠組みではなく、行為中心的で共同主義的な枠組みで捉える方法を提案することができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Nayuta Miki	４．巻 29
２．論文標題 On the Infinite Regress of a Speaker's Intentions	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Annals of the Japan Association for Philosophy of Science	６．最初と最後の頁 41-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 三木那由他	４．巻 52
２．論文標題 意図の無限後退問題とは何だったのか	５．発行年 2019年
３．雑誌名 科学哲学	６．最初と最後の頁 47-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 三木那由他	４．巻 52
２．論文標題 話し手の意味は話し手の心理といかに関係しているのか？	５．発行年 2018年
３．雑誌名 待兼山論叢（哲学篇）	６．最初と最後の頁 19-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 三木那由他	４．巻 4
２．論文標題 ビデオゲームの統語論と意味論に向けて：松永伸司『ビデオゲームの美学』書評	５．発行年 2019年
３．雑誌名 フィルカル	６．最初と最後の頁 274-310
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 三木那由他	４．巻 49(1)
２．論文標題 会話の格率の三つの破りかた：行為の理論としての会話的推意の理論	５．発行年 2021年
３．雑誌名 科学基礎論研究	６．最初と最後の頁 33-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 三木那由他	４．巻 62
２．論文標題 取り消し可能性と言い抜け可能性	５．発行年 2022年
３．雑誌名 大阪大学大学院文学研究科紀要	６．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　3件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Nayuta Miki
２．発表標題 Ad-lib Joint Action
３．学会等名 The 12th Biennial Collective Intentionality Conference International Social Ontology Society（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 三木那由他　辻大介　山口尚
２．発表標題 『話し手の意味の心理性と公共性』合評会
３．学会等名 推論主義研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 三木那由他　槇野沙央理　松井隆明
２．発表標題 トークイベント　三木那由他『話し手の意味の心理性と公共性』
３．学会等名 哲学オンラインセミナー
４．発表年 2020年

１．発表者名 三木那由他
２．発表標題 『話し手の意味の心理性と公共性』で語ったこと
３．学会等名 三木那由他『話し手の意味の心理性と公共性』書評会
４．発表年 2021年

１．発表者名 三木那由他
２．発表標題 地上のロゴス：概念分析と偏見
３．学会等名 日本大学文理学部人文科学研究所第16回哲学ワークショップ（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 三木那由他
２．発表標題 ビデオゲームの統語論と意味論
３．学会等名 ビデオゲームの世界はどのように作られているのか？
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kukita Minao, Nayuta Miki, Sho Yamaguchi
２．発表標題 What we talk about when we talk about meaning in life
３．学会等名 2nd International Conference on Philosophy and Meaning of Life（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 三木那由他
２．発表標題 意図の無限後退問題とは何だったのか
３．学会等名 日本科学哲学会第51回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 三木那由他
２．発表標題 譲歩的共同行為
３．学会等名 日本科学哲学会第54回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 三木那由他
２．発表標題 推意・意味・意図：グライス哲学における推意
３．学会等名 日本語用論学会第24回大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 三木那由他
２．発表標題 「意味する」とはいかなる行為か
３．学会等名 ワークショップ「発話行為の言語学と言語哲学」（招待講演）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計3件

１．著者名 ロバート・ブランダム（著）　加藤隆文（訳）　朱喜哲（訳）　田中凌（訳）　三木那由他（訳）	４．発行年 2020年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 437+xxiii
３．書名 プラグマティズムはどこから来て、どこへ行くのか（上・下）	

１．著者名 三木那由他	４．発行年 2019年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 285
３．書名 話し手の意味の心理性と公共性	

１．著者名 三木那由他	４．発行年 2022年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 344
３．書名 グライス　理性の哲学：コミュニケーションから形而上学まで	

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究成果を踏まえてより広い人々へとアプローチするための非学術的な執筆物として、『現代思想2020年3月号』における「研究手帳：コミュニケーションの政治的次元へ」、『ユリイカ2020年10月臨時増刊号　総特集＊別役実の世界』における「異質な共同体が現れるとき」、『現代ビジネス』2020年10月掲載の「「フラットな対話」と称するコミュニケーションに隠された「暴力」を考える」、『群像2021年1月号』掲載の「コミュニケーション的暴力としての、意味の占有」、および『群像』にて2021年5月号より現在に至るまで続いている連載「言葉の展望台」がある。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関